

■ 概況

2/27~3/4のNYMEX・WTIは、44.76~47.18ドルの範囲で推移した。

3月5日は、新型コロナウイルスの感染拡大を背景とする世界経済の後退懸念が再燃、続落した。この日、OPECは臨時総会を開催、OPECプラスの4月以降の産油量を、非加盟国の同意を条件に、150万b/dの追加減産を行うことで合意した。翌日のOPECプラスの合同会議の行方が注目されている。4月限終値は前日比0.88ドル安の45.90ドル。

週末6日は、OPECプラス合同会議で、ロシアの反対で追加減産協議が決裂、協調減産は4月末で終了となったこと、これを受けて、サウジが一転増産姿勢を示したことで急落、2016年8月初め以来、3年7か月ぶりの安値となった。ペーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は682基と前週比4基増。4月限終値は前日比4.62ドル安の41.28ドル。

週明け9日は、先週末のOPECプラス合同会議の結果を受けて、主要産油国による「安値競争」を懸念する売りが殺到し、大きく値を下げ、1991年の湾岸戦争開戦時以来の下げ幅24%を記録、2016年2月以来の安値を付けた。また、IEAは、新型コロナウイルスの感染拡大で、2020年の世界石油需要見通しを9990万b/dと約90万b/d下方修正、11年ぶりの前年比マイナスを予想した。4月限終値は前週末比10.15ドル安の31.13ドル。

10日は、米トランプ大統領の景気対策を好感した動き、前日までの急落による安値拾いの動きで、5営業日ぶりに反発した。この日、サウジアラムコは、現行970万b/dの産油量を4月から1230万b/dとすると発表した。ロシアも、4月からの増産を発表したが、ノバク・エネルギー相はOPECとの協調を

排除するわけではないと発言した。4月限終値は前日比3.23ドル高の34.36ドル。

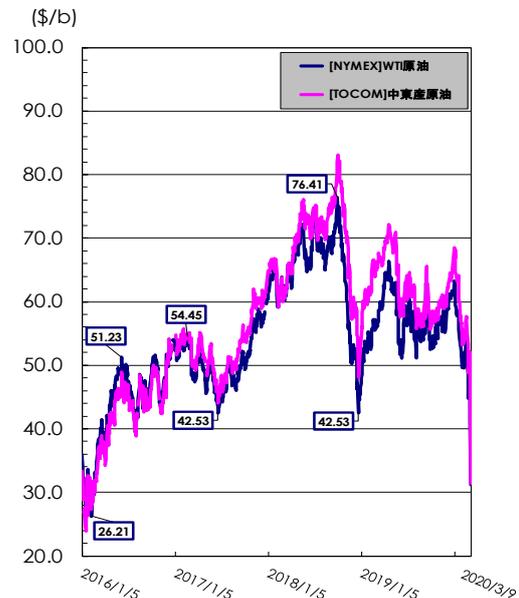
11日は、OPECプラスの協議決裂を受けて、UAEも4月からの増産を発表、供給過剰への懸念から反落した。米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表は、原油在庫が前週比大幅増加に対し、ガソリンは市場予想を上回る減少を示し、市場への大きな影響はなかった。4月限の終値は前日比1.38ドル安の32.98ドル。

アジアの指標原油である中東産バイ原油/東京市場(4月渡し)は2月27日~3月4日の間48.50~51.60ドルの範囲で推移した。3月5日51.30ドル、6日49.00ドル、9日31.30ドル、10日34.70ドル、11日35.80ドルと推移した。

為替は2月27日~3月4日の間107.36~110.32円の範囲で推移した。3月5日107.53円、6日106.25円、9日102.01円、10日103.28円、11日104.88で移した。

そのような中で、3月9日時点の小売価格は、ガソリンが前週比1.2円の値下がり、軽油も同1.1円の値下がり、灯油は同14円の値下がり(18%ベース)だった。ガソリンは7週連続の値下がり、軽油は6週連続の値下がり、灯油も6週連続の値下がりだった。この週(3月第2週)の原油コストは大きく値下がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに4.0~4.5円の値下げとなった。

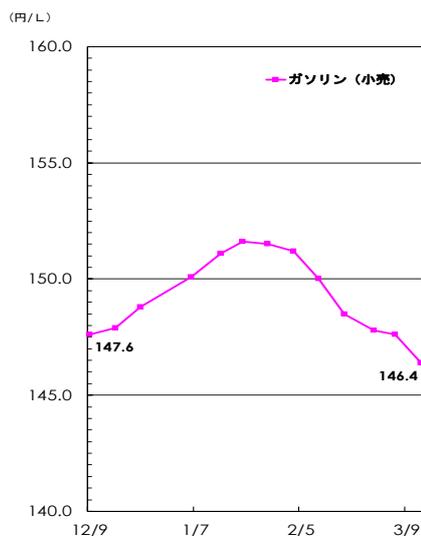
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	3/1 ~ 3/7	3,285 ▲ 65	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	83.9 ▲ 1.7	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	3/7	11,299 ▲ 544	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	3/9	31.38 ▼ -19.47	▼ -34.6
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	3/9	31.13 ▼ -15.62	▼ -25.7
	原油CIF単価 (\$/bbl)	2月中旬	70.50 ▼ -1.21	▲ 8.24
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	48,389 ▼ -1,093	▲ 5,455
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.13 ▲ 0.57	▲ 0.51
	外国為替TTSレート (¥/\$)	3/9	103.01 ▲ 5.65	▲ 8.94



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/1 ~ 3/7	945 ▲ 6	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	850 ▲ 17	▼ -	
	輸出	"	139 ▲ 60	▲ -	
	在庫	3/7	1,679 ▼ -44	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/3 ~ 3/9	51.5 ▼ -3.9	▼ -8.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/3 ~ 3/9	45.2 ▼ -4.7	▼ -11.4
		(TOCOM/中部)	3/9	50.5 ▲ 1.0	▼ -9.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/9	146.4 ▼ -1.2	▲ 1.3	

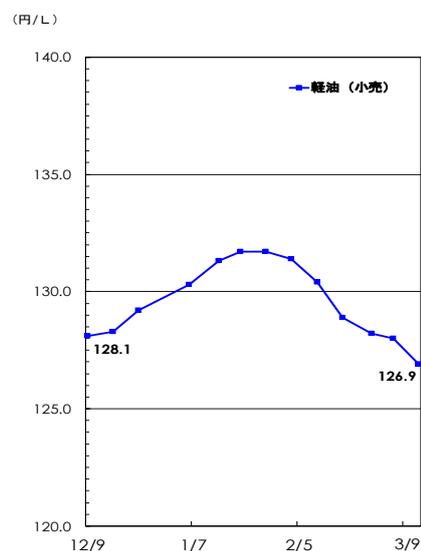
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

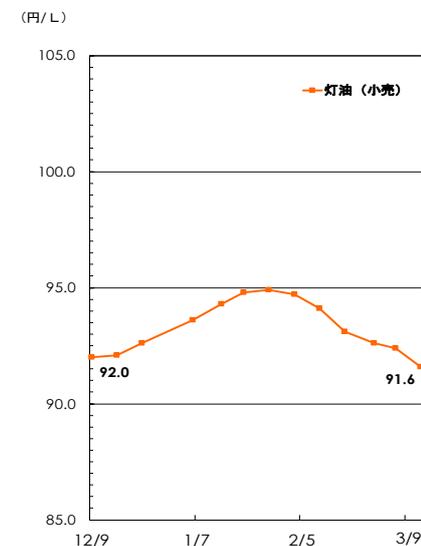
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/1 ~ 3/7	697 ▼ -70	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	627 ▲ 45	▼ -	
	輸出	"	104 ▼ -198	▼ -	
	在庫	3/7	1,307 ▼ -34	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/3 ~ 3/9	56.2 ▼ -2.8	▼ -7.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/3 ~ 3/9	56.9 ▼ -2.7	▼ -7.9
		(TOCOM/中部)	3/9	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/9	126.9 ▼ -1.1	▲ 0.9	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/1 ~ 3/7	345 ▼ -3	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	431 ▲ 45	▲ -	
	輸出	"	49 ▲ 49	▲ -	
	在庫	3/7	1,427 ▼ -135	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/3 ~ 3/9	55.1 ▼ -3.0	▼ -7.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/3 ~ 3/9	47.2 ▼ -4.8	▼ -14.9
		(TOCOM/中部)	3/9	51.0 ▼ -2.0	▼ -12.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/9	91.6 ▼ -0.8	▲ 2.0	



■ 関連情報

1 海外/原油

3月11日のNYMEX市場WTI原油は、6日のOPECプラスの減産協議の決裂を受けて、サウジ・ロシアの増産発表に続き、UAEも4月からの増産を発表、他方、IEAは前日2020年の世界石油需要を下方修正しており、供給過剰への懸念から反落した。この日の米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表は、6日までの原油在庫が前週比770万バレル増と市場予想(230万バレル)を大きく上回ったのに対し、ガソリンは500万b/d減、中間留分も640万b/d減と市場予想を上回る減少を示す、まぢまぢの結果であり、市場への大きな影響はなかった。4月限の終値は前日比1.38ドル安の

32.98ドル、5月の終値は同1.34ドル安の33.39ドル。

EIAによると、3月9日時点のガソリンの小売価格は、前週比4.8セント値下がりの1ガロン2.375ドル(69.5円/ℓ)、ディーゼルは同3.7セント値下がりの2.814ドル(81.7円/ℓ)となった。ガソリンは2週連続の値下がり、ディーゼルは9週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年3月1日～3月7日に休止したトッパー能力は28.0万バレル/日で、前週に対して9.0万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は328.5万klと、前週に比べ6.5万kl増加。前年に対しては26.1万klの減少。トッパー稼働率は83.9%と前週に対して1.7ポイントの増加、前年に対しては6.6ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリンが増産となり、その他の油種で減産となった。ガソリン/0.6%増、ジェット/13.2%減、灯油/1.0%減、軽油/9.1%減、A重油/5.5%減、C重油/6.8%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.4万kl減)。軽油の輸出は10.4万kl(前週比19.8万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で全ての油種で増加となった。前年比ではジェット、灯油、A重油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は85.0万kl(対前週2.1%増)と4週振り増加となり、29週連続で100万klを下回った。ジェット7.6万kl(対前週692.6%増)、灯油43.1万kl(対前週11.7%増)、軽油62.7万kl(対前週7.6%増)、A重油25.2万kl(対前週20.7%増)、C重油12.3万kl(対前週15.9%

増)。

(単位:千KL)

	今週 (3/1 ~ 3/7)	前週 (2/23 ~ 2/29)	前週比	
ガソリン	850	833	▲ 17	(2%)
ジェット燃料	76	10	▲ 66	(660%)
灯油	431	386	▲ 45	(12%)
軽油	627	582	▲ 45	(8%)
A重油	252	209	▲ 43	(21%)
C重油	123	106	▲ 17	(16%)
合計	2,359	2,126	▲ 233	(11%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

3月7日時点の在庫は、C重油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはガソリンが増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンは167.9万kl、前週差4.4万kl減。前年に対しては4.1万kl多い。

灯油は142.7万kl、前週差13.5万kl減。前年に対しては7.1万kl少ない。

軽油は130.7万kl、前週差3.4万kl減。前年に対しては22.4万kl少ない。

A重油は70.7万kl、前週差0.1万kl減。前年に対しては9.1万kl少ない。

C重油は184.3万kl、前週差3.8万kl増。前年に対しては13.6万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (3/7)	前週 (2/29)	前週比	
ガソリン	1,679	1,723	▼ -44	(-3%)
ジェット燃料	752	790	▼ -38	(-5%)
灯油	1,427	1,562	▼ -135	(-9%)
軽油	1,307	1,341	▼ -34	(-3%)
A重油	707	708	▼ -1	(-0%)
C重油	1,843	1,805	▲ 38	(2%)
合計	7,715	7,929	▼ -214	(-2.7%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

3月3日～9日の原油価格は、前週比で大きく値下がりし、為替も円高で、原油コストは大きく値下がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、3月3日～9日の間、ガソリン102～106円台で激しく値下がり、軽油54～58円台で激しく値下がり、灯油53～56円台で激しく値下がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン104～108円台で激しく値下がり、軽油54～60円台で激しく値下がり、灯油40～53円台で激しく値下がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン87～102円台で激しく値下がり、軽油52～59円台で激しく値下がり、灯油35～51円台で激しく値下がりして推移した。

次週の元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、4.0～4.5円の値下げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

3月3日～9日の製品スポット市況は、2月25日～3月2日平均と比べ、全油種・全取引で、激しく値下がりした。

直近の陸上スポット価格(3/3～3/9、千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは3.9円の値下がり、灯油は3.0円の値下がり、軽油は2.8円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは4.0円の値下がり、灯油は4.8円の値下がり、軽油は3.2円の値下がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが4.7円の値下がり、灯油は4.8円の値下がり、軽油は2.7円の値下がりだった。

3月第3週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、4.0～4.5円の値下げになった。

(RIM)		(単位: 円/%)		
[陸上ローリー4地区平均]		今週 (3/3～3/9)	前週 (2/25～3/2)	前週比
スポット価格	レギュラー	51.5	55.4	▼ -3.9
	灯油	55.1	58.1	▼ -3.0
	軽油	56.2	59.0	▼ -2.8

(TOCOM)		(単位: 円/%)		
[期近物/終値] [平均]		今週 (3/3～3/9)	前週 (2/25～3/2)	前週比
先物価格	レギュラー	45.2	49.9	▼ -4.7
	灯油	47.2	52.0	▼ -4.8
	軽油	56.9	59.6	▼ -2.7

※上記価格は税抜き価格

参考値 (3/3～3/9実績値) (単位: 円/%)			
油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -3.9	▼ -4.7	▼ -4.3
灯油	▼ -3.0	▼ -4.8	▼ -3.9
軽油	▼ -2.8	▼ -2.7	▼ -2.7
A重油	▼ -2.6		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

3月9日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比1.2円安の146.4円、軽油も同1.1円安の126.9円、灯油は18%ベースで同14円安の1,649円(1%ベースでは同0.8円安の91.6円)。ガソリンは7週連続の値下がり、軽油は6週連続の値下がり、灯油も6週連続の値下がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは1県、横ばいなし、値下がり46都道府県となった。全国最安値は埼玉県の140.8円(同0.9円安)、その次に安いのは岩手県の141.5円(同1.5円安)、最高値は長崎県の159.0円(同1.5円安)。横ばいなし、値上がりしたのは0.1円高の熊本県(同

0.1円高)、最も値下がりしたのは同4.5円安の鳥取県(142.4円)だった。

先週の原油コストは値下がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社4.0円の値下げとなった。今週は、原油価格は大きく値下がりし、為替レートも円高で、原油コストは大きく値下がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、4.0～4.5円の値下げとなった。次回調査時(3月16日)のガソリン・灯油の小売価格は、値下がりが見込まれる。

(資工庁公表) [週動向]		(単位: 円/%)		
		今週 (3/9)	前週 (3/2)	前週比
小売価格	レギュラー	146.4	147.6	▼ -1.2
	灯油	91.6	92.4	▼ -0.8
	軽油	126.9	128.0	▼ -1.1

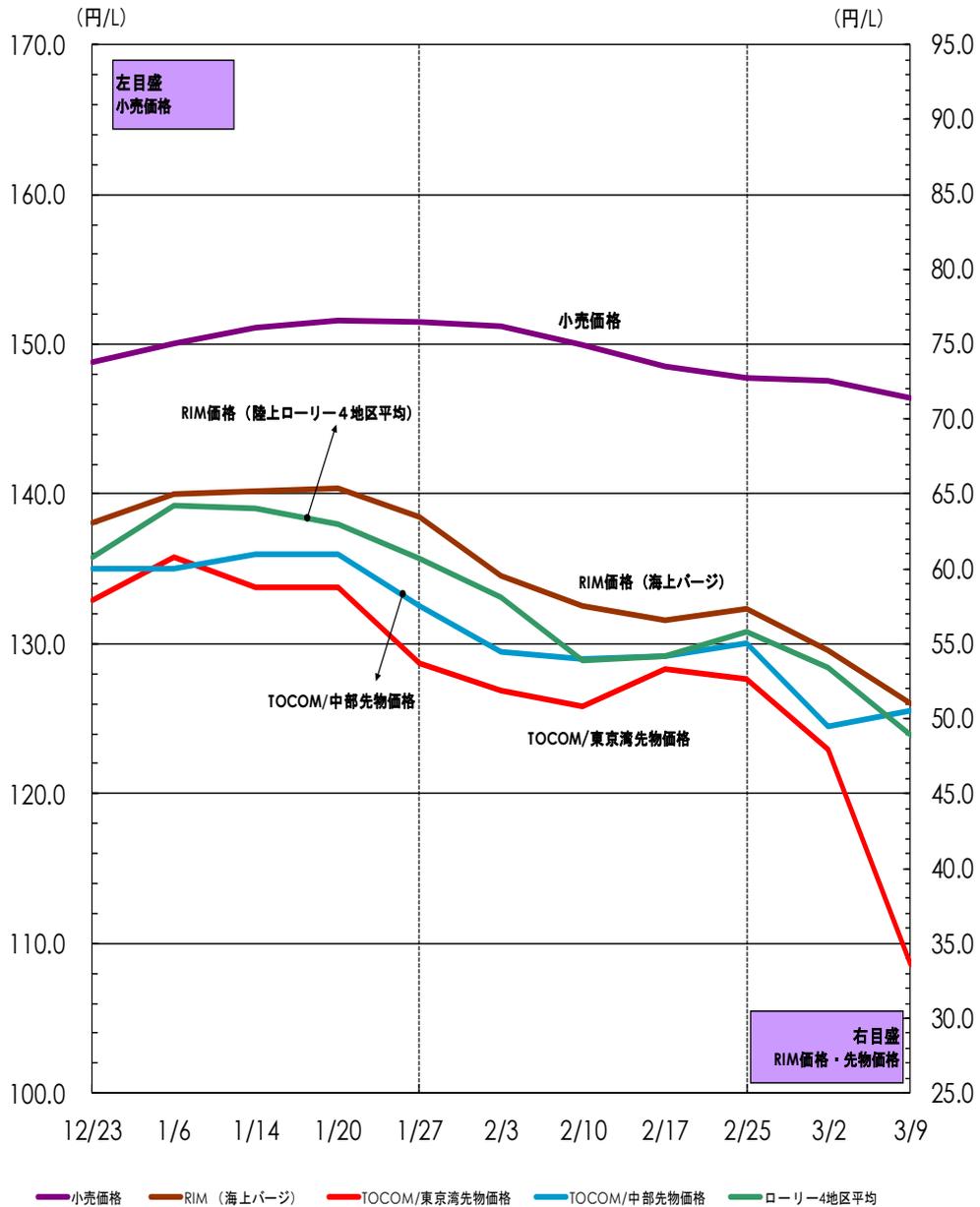
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/12/23 ~ 2020/3/9)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2019第48号)の公表は、3/20(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。